くじら企画　第十五回公演

「山の声」

――　ある登山者の追想

作・演出　大竹野正典

登場人物

登山者１
登山者２

眠りを眠っている者を呼び覚ますように雪嵐のゴウゴウという声が
彼方から吹きすさぶ。
真っ暗な中に七転八倒する音。
鉈のような物で板を剥ぐ音、しばし。
やがて薄明かりとともに雪が剥がれた板の隙間から吹き込んでくる。
大きなルックザックが投げ込まれ、荒い息をした登山者1が転がり込んで現れた。
頭からすっぽり被ったウインドヤッケの顔面の部分にはセルロイドが貼られ、
凍ってバリバリになっている。
厚手の手袋を脱ぎにくそうに脱ぐと、ヤッケの頭巾を取り、素手に息を吐きかけ
執拗にこすり合わせた。次いで顔を洗う如く、又執拗に顔面を摩擦した。
ポケットの中をまさぐり、凍った甘納豆を一掴み取り出し、バリバリ噛み砕く。
そこでようやく登山者1は自分の居る所の暗さに気が付いた。
ルックザックを引き寄せ、中からカンテラとローソクとマッチを探り出す。
それをかざして辺りを伺う。

登山者1　――　なんにも　なさそうやな　――

登山者1、あきらめたように座りなおし、ルックザックの中からアルコールランプと

コッヘルを取り出した。登場してきた板の割れ目に半身を乗り出し、コッヘルで雪をすくうとアルコールランプにのせ、火に掛けた。ポケットから甘納豆を一掴み取り出しコッヘルの中に放り込む。登山者1、アルコールランプの火に手をかざして暖を取った。

その背後の闇の中からルックザックを背負った登山者2が現れた。

登山者2　私は神戸に来てから三年ぐらい旅行の味を知らなかった　大正十年遠山様設立のデテイル会に入ってからこの味が少し分りだし　大正十三年以来兵庫県内の国道と県道を四百里ほど歩いた　大正十四年の八月の終わりには蓮華温泉から白馬岳に登り鑓(やり)温泉に下り　その足で吉田口から富士山に登り御殿場に下山した　それを皮切りに九月には大峯山脈を縦走し大台ケ原山に登った　十月には大山に登り船上山(ふなかみやま)へ廻ってみた　大正十五年七月終わりには中房(なかぶさ)温泉から燕(つばくろ)岳へ登り大天井(おてんしょう)岳西岳小屋を経て槍ヶ岳の絶頂を極め穂高連峰を縦走し上高地へ下山　平湯から乗鞍岳に登り石仏道を下山　日和田から御嶽山に登り王滝口下山　上松(あげまつ)から駒ケ岳に登り南駒ケ岳まで縦走し飯島へ下山

八月中頃には材木坂を登って室堂に至り浄土山　雄山(おやま)　大汝峰(おおなんじみね)　別山(べっさん)と縦走し剣岳を極め長次

郎谷(たん)を下り小黒部を経て鐘釣温泉へ下山　八月終わりには戸台を経て仙丈岳を極め引き返し駒ケ岳へ登り台ケ原へ下山　大泉村から権現岳を経て八ヶ岳連峰を縦走し本沢(ほんざわ)温泉へ下山　沓掛より浅間山に夜行登山をなし御来光を拝し小諸へ下山等の登山をした　――
これらの登山中私はいつでもリーダー無くただ1人だったから　日数は割合多く費やしたが費用は少なくてすみ　精神修養　山への自信等多くの利益を得た　――

登山者1、コッヘルの中のものをスプーンですくって食べていた。

登山者2　(覗いて)まだ溶けてへんやん
登山者1　なに？
登山者2　それ　まだ冷たいやろ
登山者1　ええねん　氷あずきや
登山者2　氷あずき？
登山者1　そう　火に掛けてるから終いにぜんざいになるんやけどな
登山者2　どんな食べもんや
登山者1　甘納豆を雪にくべたんや　即席ぜんざい　けっこうイケる

登山者２　沸々煮えるまで待ちいな　体温(ぬく)もらんやろ

登山者１　疲れた体には最初冷たいもんがええんや　渇いた喉がさっぱりする　頭も冴える　そうやってゆっくり味わってるうちに少しずつ甘納豆が煮えてくる　な　煮えたところにモチでも一つ放り込んでみいな　最後には立派な熱々ぜんざいでしめれて体もほっこり　どや　一石二鳥やろ

登山者２　えらい横着な食いもんやな

登山者１　俺の発明や　――　君も食うか？

登山者２　いや　ええわ

登山者１　そうか　後でくれ云うても知らんで（食べようと）

登山者２　モチ入れへんのかいな

登山者１　モチ？

登山者２　今云うたやろ　モチでも一つ放り込んでみいなて

登山者１　そらあったらの話や

登山者２　ないんかいな

登山者１　あったら入れてるがな

登山者２　あほくさ

登山者１　モチは重たいからな

登山者２　ほな最初から云いな

登山者１　いや入れるつもりやってん　つもりやってんけど置いてきてしもた
登山者２　どこに
登山者１　下の山小屋にデポしたある
登山者２　あああ(ため息)
登山者１　アタックにこんなに手間取るて思えへんかったしな
登山者２　山の天気なめとったなァ
登山者１　山の天気なめてた訳やあれへん　俺はもっとひどい嵐の中でビバークした事なんぼでもあるで
登山者２　ほう
登山者１　ええか　吹雪の雪山で寝たらあかんてよう云うやろ
登山者２　そら吹雪の中で寝たら　グッて体温下がって　凍死してまうわな
登山者１　それはな　腹が減った上に　体力を消耗し切っとるから　寒さにやられるねん　――　適度の栄養と体力が温存できてたら　多少の吹雪の中でも充分寝られる　凍傷にさえ気をつけとったら大丈夫や
登山者２　さすが不死身の　――　あっ甘納豆煮詰まっとるで
登山者１　こらあかん（アルコールランプ消した）（コッヘルかき回しながら）大丈夫　まだ食える(食べた)
登山者２　適度の栄養ってその甘納豆？
登山者１　君　甘納豆馬鹿にしたらあかんよ　激しい運動をしてる時　砂糖を取ると即エネルギーになる　いわばディーゼルエンジンを動かす軽油みたいなもんや　おまけに小豆でタンパク質も取れる　一石二鳥や　それからこれ(もう一つのポケットから小魚を掴み出した)　雑魚の油揚げ　カルシウムと

塩気が取れて　これも一石二鳥　甘納豆と雑魚の油揚げがあったら　怖いもんないよ　歩きながら食えるから食事の時間も稼げる　これまた一石二鳥や

登山者２　一石二鳥が好きやな

登山者１　合理主義者て云うてくれ　人間が一人で一週間　何も無い山の中で暮らす為には　合理的に物事考えなあかん　どえらい重い食料　ルックザックに詰め込んで担いで足元フラフラ　では話にならん

登山者２　確かに米は重たいもんな　――　そうそういっぺん二月の立山でえらい目に遭うたよ　室堂の小屋で米炊いて握り飯にしてな　雄山の上でさあ食べよう思たら　握り飯凍ってカチンカチンや　歯が立たん　あの時ほど握り飯が恨めしかった事ないよ

登山者１　そうやろ　そこで人間は考える訳や　俺の甘納豆と雑魚の油揚げも試行錯誤の賜物や　握り飯が凍って食えんのは大きさにも問題があるわな　甘納豆は凍っても小さいから　口の中に放り込んでしもたら　すぐ溶けよる訳や

登山者２　あ　なる程な

登山者１　何事も経験積まなな　実は俺も最初の雪山でカマボコ持って行ってんけどな

登山者２　八ヶ岳やな

登山者１　そう八ヶ岳の夏沢温泉　そこで凍ったカマボコかじって正月の元旦を迎えたんや　みじめなもんや

登山者２　ワビしいなァ

登山者１　世間は正月や云うのになァ

風の音が聞こえる。
何処からとも無く雪片が吹き込んできた。
登山者1、食事の後片付けをした。

登山者2　昭和四年の元旦は吹雪で明けた　予想はしていたものの山の中の一軒家にいて雪に降られるのは淋しい　元気を出して夏沢峠まで行ってみる　道は良く分かるし危険と思われるようなところは無い　スキーは昨日と同じく五寸くらい沈む　峠の頂きに雪が四尺ほど積もっている　随分寒いのですぐ帰って布団の中に潜り込む　――　今日は元旦だ　町の人々は僕の最も好きなモチを腹いっぱい食い　嫌になるほど正月気分を味わっていることだろう　僕もそんな気分が味わいたい　故郷(ふるさと)にも帰ってみたい　何一つ語らなくとも楽しい気分に浸れる山の先輩と一緒に歩いてもみたい　去年の関の合宿の良かった事だって忘れられない　それだのに　それだのに　なぜ僕は　ただ一人で呼吸(いき)が布団に凍るような寒さを忍び　凍った蒲鉾ばかりを食って　歌も唄う気がしないほどの淋しい生活を　自ら求めるのだろう

登山者1　有給休暇が年に十四日　盆と正月を山行の日程に組み入れな　仕様があらへん

登山者2　月給取りの宿命やな

登山者1　月給取りの登山者の宿命や

登山者2　パイオニアにならんとな

登山者１　パイオニア？
登山者２　月給取りの登山者のパイオニア
登山者１　山は金持ちだけのもんやない！　――　てか？
登山者２　先輩がやってることはそういう事やろ
登山者１　俺は山が好きなだけや　ヒエラルキーとか闘争とか関係あらへん
登山者２　そやけど世間は期待しとるで　関東の金持ち連中や大学生の鼻を明かすのは先輩しか居らへんて
登山者１　関東も関西もあらへん云うねん　金持ちでも貧乏人でも登山を楽しむ気持ちは同じや　只違うのはスタイルだけや　俺は案内人を雇う金が無いから一人で登るいうだけの事や
登山者２　そやけど向うはそう思てへんやろ　「案内人もなしに無謀な登山する輩(やから)が　――　」とか登山誌に掲載されたあった事もあったやろ
登山者１　云いたい奴には云わせといたらええねん　山は誰のもんでもあれへん
登山者２　山は誰のもんでもあれへん　――　確かにそうや　せやけど俺らには　少なくとも俺には　――
登山者１　何や
登山者２　――（首を振った）

風が吹雪いた。
雪片が何処からとも無く舞い込んだ。

登山者１　――　寒いなやっぱりアルコールランプ焚こか
登山者２　ええよ　もう残り少ないやろ　――　いざいう時まで残しといた方がええやろ
登山者１　そやな　もう二、三時間で夜も明けるやろ　吹雪きもすこしは収まるかも知れへん　我慢しよか
登山者２　ここ　何処やねんやろ
登山者１　天上沢やろ　――　とにかく谷を降りてしまうこっちゃ　湯俣まで出たらこっちのもんや　湯俣には熱い湯がある　もしかしたら人が来てるかも知れへん　小屋の中探したらどっかに食糧もあるやろ
登山者２　温泉浸かりたいな
登山者１　温泉浸かって　腹いっぱいモチ食いたい
登山者２　ええな
登山者１　正月やからな
登山者２　雑煮やな
登山者１　雑煮　鯛の雑煮
登山者２　鯛か　豪勢やな
登山者１　浜坂の網元やで　正月は鯛の雑煮て決まったある　ええダシ出るで
登山者２　すましかいな
登山者１　あたりまえや　鯛の切り身に薄切り大根　焼モチ二つに三つ葉散らして　ダシ汁張るんや
登山者２　俺の家は白味噌や　小芋に金時人参　大根　油揚げ　それにモチ入れて大鍋で煮るんや　甘もうて

美味い　ことに三日目の雑煮はモチが溶けて汁がトロトロになるんや　えも云われん程美味い

登山者１　なんやそれ　シチュウやあるまいし

登山者２　アホ　雑煮云うたら白味噌に決まってるやろ

登山者１　そんな雑煮　俺は認めん

登山者２　甘納豆煮て食う奴に云われた無いわ

登山者１　それとこれとは話が違うやろ

登山者２　他人（ヒト）の家の食生活を馬鹿にする奴は　ええ死に方せんぞ

登山者１　馬鹿にしてやせんが　――　しかし雑煮云うもんは　――

登山者２　もう云うな　――　すましやろが白味噌やろが　どうせ食えん

登山者１　どうせ食えんが　雑煮云うもんは　――　止めた　アホらし

登山者２　――　お袋　俺の雑煮残して　待っとるやろな　――

登山者１　そうやな

登山者２　冬山に登るようになってからな　親父が落ち着かんようになった　ルックザックに荷物詰めてたら「これ持って行け」云うて米やら味噌やら出しよる　いらん云うても聞きよれへん　俺が放ったらかしてると自分でルックザック開けて米と味噌詰めこんどる　俺はそんな親父を黙って見とる　重いけど背負わな仕様ない　――　親父　なんで「山なんか行くな」て怒らんのやろ

登山者１　云われても行くやろ

登山者２　そらそうやけど
登山者１　亡くなった俺の親父は　俺の顔を見る度に「登山は危険やから止めてくれ」て云うとった　「山止めて嫁さん貰てくれ　お袋が生きてたらお前のこと放っときゃせんかったやろけど　儂はお前の嫁はんと子供の顔見て死にたい　儂の病気は段々重なりよる　もう治る見込みはない　なんとか安心させてくれ」てな　大切な親からそんな事云われると本当に申し訳ないんやけどな　嘘云うだけの勇気あれへん　正直に「親父さん　心配するな　俺には命懸けで愛してる恋人があるんや　よう知ってはるやろ」云うてしもた　親父は「ああ　お前は何を云うんや　儂の最後の頼みで云うのにまだ迷いの夢から覚めんのか　可哀想な奴や　お前はほんまに恐ろしいもんに憑かれてしもたなぁ」てシクシク泣き出しよった　――　ほんまに恐ろしい　忘れようとすればするほど　心の奥へ食い込んで来よる　どんなに我慢しようとしても駄目や　親父の見舞いで浜坂へ休暇貰て帰ってるのに「では親父さんちょっと行って来ます」て山へ行ってしまう　親父の見舞い一時間に山二日や
登山者２　救われんなァ
登山者１　救われんよ　俺も君も
登山者２　なんで山なんかに登りたなるんやろ？
登山者１　岩と雪と風しかあれへんのにな
登山者２　虫も鳥も獣も居らんのにな
登山者１　命のかけらも見つからへん　標高三千メートルの一月は　まるであの世みたいなもんか
登山者２　真白　真黒　真青　群青　モルゲンロートに染まる朝焼け　――　まるで色だけが生きているようや　――　ゾッとするほど美しい　人間が見れる美しさの限界がここにはあるやろ　いやホンマは

人間なんかが見たらあかんのかも知れへん

登山者１　そうかも知れんな　そやけどやっぱり見たなるのが人間の愚かさや　憐れなもんや　こんな重たい荷物背たろうて

登山者２　どんどん　険しい所へ　誰も登った事のない所へ　誰にも行かれへん所に登って行きたい

登山者１　なんでや？

登山者２　優越感か？

登山者１　それもあるやろ　しかしそうか？

登山者２　それだけやない　確かに

登山者１　しかし　解らん

登山者２　分らん　――

風が吹雪いた。

何処からか雪片が舞い込んだ。

登山者１　――　きっと俺は　先輩を越えたかったんやろ

登山者２　なんで俺なんか

登山者１　あこがれやったからな　胸踊ったで　最初に先輩のウワサを聞いたんが　六甲山の全山縦走　――
朝六時に和田岬の三菱内燃機神戸製作所の寮を出発して　塩屋から鉢伏山（はちぶせやま）　高倉山　横尾山　高取山　ヒヨドリ越えから　菊水山（きくすいさん）　再度山（ふたたびやま）　麻耶山　六甲山最高峰　石の宝殿から水無山（みずなしやま）を抜けて
　大平山　岩原山　岩倉山と縦走して宝塚　宝塚から電車も乗らんと和田岬の寮に帰り着いたのが夜の十一時三十分　およそ百キロの道のりを十六時間足らずで　やっつけてしもたんや　人間業や無い思た　天狗の仕業や先輩のやったことは　――　俺はそれを聞いた夜　胸がドキドキして一晩中寝られんかった　先輩に会いたい思た　それで居ても立っても居られんようになって　先輩の真似した

登山者１　真似？

登山者２　俺もやった　六甲山の全山縦走　塩屋から宝塚まで　――　足がくがくになった　三宮の家まではとてもよう歩けんかった　宝塚から乗った電車の中で　俺は自分の事をあざ笑ったわ　お前には到底無理や　とても追いつけん　お前みたいなアマチュアにはやれる事やあれへん　――　腹が立ったよ　腹が立って涙がこぼれた　電車の中で俺は泣いとった

登山者１　変な奴やな　君は

登山者２　山しかあれへんやん　俺らには　――　少なくとも俺には　高取の電車工場でソロバンはじいてるだけの人生なんか耐えられる思えん　そのうち戦争が始まって　召集されたとしても　お国の為に死ぬのが本望とも思えん　何の為に生まれて来たのか判らんが　俺は今　山が好きで　山に登って

思い切り山気を吸いたいいうのは事実で　今　その為に俺は生きている　しかしその為に生きている山で俺は　先輩には勝てん　こんな口惜しい事は無いやろ

登山者１　勝ち負けや無いやろ　山は

登山者２　山は勝ち負けやないが　人間同士はやっぱり勝ち負けやろ

登山者１　俺を越えてどうする　俺はただの一登山者に過ぎん　俺よりも凄い奴らはウヨウヨ居る　――　詰まらん事考えるな

登山者２　人間には目標が必要なんや　目下の所　俺の第一目標は先輩しか居らん

登山者１　そしたら　今この場から俺が消えたらどうや　俺いう目標が消えたら　山登り止めるか？

登山者２　――

登山者１　な　そういう問題やないで　登山に必要なんは山だけや　山だけに目標を置いたらええねん　里山から北アルプス　夏山から冬山　こつこつ着実に実力をつけて　より難しい山に登るのが俺等の目標や

登山者２　それでも　俺の目の前には先輩が居る

登山者１　――　君　俺が初めて冬の槍ヶ岳に登った時のＲＣＣの報告会に来とったやろ

登山者２　ああ興奮して聞きに行ったわ　なにせ初の槍ヶ岳厳冬期単独登行を成功させた加藤文太郎が喋るいうんで　狭い会場に五十人以上押しかけとった　藤木先生なんか「日本のウインクラー」云うて先輩の事　激賞しとったな

登山者１　今　思い出しても顔が熱うなってきよる　口下手な俺は　関西登山会の錚々たるメンバーの前で顔

もよう上げんかった　何喋ったかも憶えてへん　憶えてるのは喋ろう思てた事の十分の一も喋れんかった事だけや

登山者２　確かに会は盛り上がれへんかったけど　俺は初めて先輩の顔が見れて感激したよ　なにせ「日本のウインクラー」やもんな

登山者１　俺はウインクラーがアルプスの有名な登山家の名前やいう事さえ知らんかった無知な男や　そんな偉大な登山家やて知ってたら俺は恥ずかしいＲＣＣの報告会に出席なんか出来へんかったやろ

登山者２　謙遜しなや　先輩のやったことはウインクラーに比肩されてしかるべきやろ　厳冬の日本アルプスをたった一人で登れる人間なんて　そうそう居らんで

登山者１　あの報告会の時　四月の奥穂高の話もちょっとしたと思うけど　あの時はな実は一人で登った訳やないねん

登山者２　それは初耳や

登山者１　忘れもせん　あの時の事は　――　四月一日に一ノ俣小屋を出て涸沢まで入った　ホンマは奥穂高を直登するつもりやったが　あの峻険な凍りついた岩肌を見たとたん　俺は怖気づいてしもたんや　俺にはクライミングの技術はなにも無い　それで奥穂高を横目で見ながら　涸沢岳を往復して横尾の岩小屋まで戻って来た　このまますごすご引き返すか　予定通りに奥穂高を攀じ登るか俺は迷った　その時や　岩小屋に男が一人でやって来よった　聞けば八高山岳部のＯＢで東大山の会の桑田英次て名乗りよった　俺も名前くらいは聞いた事ある学生登山界の一流クライマーや　丁度桑田君も明日奥穂高に登る云いよる　もっけの幸いや　一も二もなく一緒に登らしてくれて　俺は頼んだ　彼も俺の名前を知っとったんやろ　快く了解してくれたんや　翌日俺は桑田君とザイルを結ん

登山者２

で奥穂の岩肌にかじりついた　氷はガチガチでアイゼンの刃も立たん　ホンマにこんな所登れんねやろか　一歩でも滑ったら落ちて死ぬのは間違いあれへん　そう思ったら手も足も鉛の枷にはめられたように動かんようになってしもた　上を見上げたらリードを取ってくれた桑田君が　ピッケルでステップ刻みながら一歩一歩着実に登って行きよる　絶妙のバランスとザイルワークや　ザイルが伸び切ると上から登って来いて合図をくれよる　ザイルで確保されながらも俺の心臓は爆発しそうやった　下なんか見られるもんやない　怖かったよ　恐ろしかったよ　なんでこんな所に俺はしがみついてるんやろ　降ろしてくれ　帰りたい　暖かい布団の中で安らかに眠りたい「ごめんなさいごめんなさい　――」　誰に謝ってるのかも判れへん　俺は口の中でぶつぶつ呟きながら　桑田君が引っ張ってくれるザイルと桑田君が刻んでくれたステップを頼りに　まるで引きずり上げられるようにして登った　俺の目には　研ぎ澄まされた氷壁にアイゼンのツァッケをかけピッケルを打ち振るって攀じる桑田君の伸びやかな姿態だけが見えとった　――　気が付けば俺は奥穂高の頂上に立ってたよ　いや立たせて貰ったんや　俺は桑田君に握手されながら　桑田君の身体が光を放ってるのを見た　これこそアルピニズムや　桑田君の身体からアルピニズムの光芒が蒼白く放射されているのを俺は見た　――　それに引き換え俺はなんや？　脚力と体力に任せてひたすら歩き登るだけの愚鈍な動物や　尾根道づたいにやたら縦走しまくるだけの能無しや　何が「日本のウインクラー」や　俺には人から賞賛される資格なんか一つも無いよ

そら桑田さんは　クライミングの技術は先輩よりも上かも知れん　しかしそれは大学の山岳部でみっちり叩き込まれたもんや　――　そんなものは練習したら誰でも身につく技術に過ぎんわ　――

登山者１　君には俺の苦しみが解らんのや
登山者２　クライミングの技術くらい　なんやったら俺が　――
登山者１　そういう事やあれへん
登山者２　そしたら　何や
登山者１　――　俺と　人が持ってる俺のイメージとどんどん離れていくなァ　――

風の音が聞こえる。
雪片が、何処からとも無く舞い込んだ。
登山者１、靴をさすった。

登山者１　君　足痛ないか
登山者２　俺はもう　――　痛ないよ
登山者１　そうか　俺は痛なってきた　凍傷になるかも知れんな　このままいったら
登山者２　靴脱がれへんのか
登山者１　靴紐が凍って解けん
登山者２　そうか
登山者１　靴紐切ったら脱げんこともないやろが　切るとなったらズタズタに切らんとあかんやろ　そしたら
　　もう靴は履けん　我慢するしかないやろな
登山者２　湯俣に着くまでの我慢やな

登山者１　湯俣に　早よ着きたいな　――

間。風の音。

登山者１　君が初めて　日本アルプスに来たんはいつや
登山者２　四年前や　先輩と同じ　七月に白馬岳登って　それから次に　中房温泉から　燕　槍　穂高　――
登山者１　なんや　まったく同じルートやんか
登山者２　先輩の歩いた所はちゃんとトレースせんとな　崇拝者としては
登山者１　あほやなぁ　――　俺は　もう十一年前になるか　よかったな　初めての北アルプスは
登山者２　よかった　燕岳の稜線に初めて立った時の感激は　今でも忘れられん
登山者１　見渡す限りに巨大な尾根が何処までも何処までも続いとった　沢という沢に残雪が残って　幾筋もの白い雪渓が並んどった　谷間にぎっちり雲を詰め込んで　巨人の群れが頭並べとる　偉大という言葉はこの景色の為に作られたんやと俺は思たよ
登山者２　しっかり勉強してきたはずやのに　どれがどの山か見分けがつかへん　ただ北から南へと続く遥かな尾根の丁度真中に　槍ヶ岳の穂先が天を指して抜きん出とった　槍ヶ岳を中心にして東西南北に尾根が続いとる　この尾根を縦横無尽に歩けたらどんなに素晴らしいかと思たよ
登山者１　あの空の青さ　高さ
登山者２　濁りのかけらも無い青さ　宇宙にそのまま続く青さ

登山者１　夜の星　夥しい星
登山者２　街中では考えられんほどの夥しい星　手に掴めそうな星
登山者１　手に掴めそうな星が　天だけやない右にも左にも
登山者２　前にも後ろにも　手に掴めそうな星が俺の身体を取り巻いとる　まるで宇宙の中に居るようや　―
登山者１　あの夜　北アルプスの稜線を初めて一人で歩いた素晴らしい夜　こんなものに出会ってしまった以上　生涯　この世界から逃れ出ることは出来んと俺は思た
登山者２　俺もや　先輩の後ろを追いながら　段々抜き差しならんようになってしもた
登山者１　絵葉書買うたやろ
登山者２　買うた　山小屋で
登山者１　焼印のスタンプ手帳に押して
登山者２　山頂に着いたら　自分の名刺　ケルンに挟んで
登山者１　万歳三唱
二人　（叫んだ）バンザーイ　バンザーイ　バンザーイ　ベルグハイル　ベルグハイル　ベルグハイル
登山者２　初めての槍ヶ岳の山頂は快晴で見遥かす限りの山が見えた
登山者１　自分の来た道を振り返ると　遥か北東に最初に立った燕岳　大天井　東天井　常念岳　蝶ヶ岳　大滝山
登山者２　梓川の谷をこちら側へ明神岳　前穂高　それから吊尾根を挟んで奥穂高　西穂高　遠く霞んで乗鞍岳と御岳も見える
登山者１　そこから西に目をやれば　錫杖　笠ヶ岳　抜戸岳　弓折岳　樅沢岳　双六岳

登山者２　三俣蓮華　鷲羽岳　水晶岳　野口五郎岳　遠く離れて薬師岳
登山者１　更に遠くその北には剱と立山　後ろ立山の鹿島槍ヶ岳まで陸続と山並みが連なっとる
登山者２　眼下に目を落とせば　槍沢の雪渓を女学生の一団が登って来るのが蟻のように見える　エーホー
（叫んだ）
登山者１　槍の肩の小屋には　今着いたばかりの学生らしい三人組がルックザックを降ろしとる　エーホー
（叫んだ）
登山者２　東鎌尾根の岩場を　案内人に連れられたチロリアン姿の男二人が攀じ登って来よる　エーホー
登山者１　西鎌尾根から　どっかの山岳会らしい連中が七、八人連れ立ってやってくる　エーホー
登山者２　夏の槍ヶ岳は大繁盛や　老いも若きもこの山目指して登ってきよる
登山者１　槍ヶ岳だけやあれへん　穂高も立山も剱も富士山も　夏は人でいっぱいや
登山者２　俺は拍子抜けした　地元の山であれだけトレーニングを積んで　意気込んで来た北アルプスに　七つ八つの子供までが登って来よる
登山者１　そら仕方ない　山は誰のもんでもあれへん　ゆえに山は皆のもんや　夏の山道は二本の足さえあれば誰にでも登れるのは道理や
登山者２　そやな　――　人が多ても夏山をしっかりやってんと　冬山には登れんしな
登山者１　しかし　本当の事を云うと俺も思た　これでは敷居が低過ぎる　気軽にやって来る連中が多過ぎる　道端に足投げ出して「つらいしんどい」云うてる連中を見ると無性に腹が立った　山を舐めるな　もっと鍛錬してから来いて云いたなった

登山者２　雪渓の中を黄色い声で　無邪気に喜んでる女性登山者を見かけた時には　そこが如何に危険か教えてやりたくなった

登山者１　俺は他の登山者を追い越しながら黙々と歩いた

登山者２　何かが違う　て思いながら　黙々と歩いた

登山者１　あの年の夏　俺は一人で貪欲に歩いた　北アルプス　中央アルプス　南アルプスの主要な山々を七月と八月の二ヶ月間で　合計二十三日の休暇を取って　貪り歩いた　しかしそれでも達成感は得られんかった

登山者２　宇宙の中にたった一人居るようなあの感覚　満たされた孤独　途方も無い寂寥　俺の求める山

登山者１　次の年の夏も俺は歩いた　まだ登ってない日本アルプスを　人の少ない山中を中心にして　独りで踏んだ　限られた休暇日数の中に　人から見れば無茶苦茶な工程を組んで俺は歩いた　一日最低十二時間　道に迷えば十五時間　日が沈んでも俺は歩き　行き暮れた時には着の身着のままで野宿もやった

登山者２　満天の星空のなかに一人居ても　朝焼けに染まる山の峰を眺めても　五里霧中の霧が晴れて不意に目の前に巨大な岩峰が現れても　心慰められはするものの　何かが欠けとった

登山者１　俺は山に飽きたんか　――　気持ちがスレていきよる　何を見ても何処かで見たような感じがしよる　只　山さえ歩いていれば　それで満足やったはずやのに　踏んだ山の頂きと尾根道の走行距離はどんどん延びてゆくのに　俺と山との距離はどんどん離れてゆきよる

登山者２　俺は山に呼びかけた　エーホー

登山者１　エーホー

登山者２　エーホー
登山者１　エーホー
登山者２　山は俺の虚ろな声を返すばかりや　俺は山に何を求めてるんやろ
登山者１　秋になって有給休暇を使い果たしてしまった俺は　三菱神戸造船の職場で黙々と製図版にディーゼルエンジンの部品の線を引きながら　どんどん寡黙になっていった　元々人付き合いが苦手やったが　それまで以上に押し黙った　酒もよう飲まんから会社の連中とは付き合わん　会社の行き帰りに通る神戸の街の雑踏も息苦しい　俺は走るような早足で会社と下宿を往復した　六甲山の山並みを眺めたり　週末に近場の山に登る事だけが僅かな慰めやった　会社の連中はそんな俺を変人扱いしよった　――　君　俺の笑い方て変か
登山者２　笑い方？
登山者１　会社の奴等がな　俺に笑いかけられたら腹が立つ云いよるねん　どうやろ(笑ってみせる)
登山者２　止めてぇや　気持ち悪い
登山者１　やっぱり気持ち悪いか
登山者２　そら急に笑われたら気持ち悪いやろ
登山者１　俺は親愛の情を示してるつもりやねんで　そやのに　人を馬鹿にした笑いに見えるらしいんや
登山者２　そうかなァ
登山者１　花子にも云われた
登山者２　奥さんにも？

登山者１　慣れたらそうやと判るけど　最初のうちは俺の笑顔がとっつきにくかったて　人に誤解される笑顔やて云われたんや
登山者２　そら悲しいな
登山者１　笑い方まで不器用いうんは　我ながらにショックやで　――　しかも嫁はんに指摘されるまでの三十年間　それを知らんと生きとった　笑い掛けても人がプイと横向くんはなんでやろと首傾げながら生きとった
登山者２　取り返しがつかんな
登山者１　ナチュラルに笑て人に誤解を受けるんやったら　いったいどう笑えばええんやろな　鏡見ながらこっそり笑顔の練習もしてみたが　顔が引きつるばかりでどもならん
登山者２　誰にかてコンプレックスの一つや二つはあるよ　先輩にはそれをカバーして余りあるだけの脚力と根性があるんや　先輩の事を憧れてるんは俺ばっかりやあれへん　山登ってる若い連中は皆憧れとるんやで　胸張ってたらええねん
登山者１　君にそんなこと云われたら　俺はなんか恥ずかしいなるよ　――　済まんな　吉田君
登山者２　先輩が謝る事なんも無いよ　――　俺は嬉しいんや　先輩と山登れて光栄や

風が吹いた。
雪片が舞い込んだ。

登山者１　――　君　遠山さん知ってるやろ

登山者２　ああ　デテイル会の会長さんやな
登山者１　あの人　俺の上司やねんけど　――　あの頃　会社で浮いてた俺のこと気にしてくれはってな　よう家でご飯食べさせてもろたんや　山の本仰山持ってはって　色々見せてもろた　世界中の山の本があったよ「これからは日本人も世界に出る時代や」云うてヒマラヤの写真も見せてくれはった
　エベレスト云う山や
登山者２　エベレスト　俺も聞いたことあるわ　世界一高いて云われてる山やな
登山者１　そうや　八千八百メートル以上あるらしい
登山者２　八千八百メートルか　――　富士山二つ重ねてもまだ千メートル以上高い　考えられんな　そんな山頂上まで登れるんかいな
登山者１　さあ判らん　まだ登った奴は誰も居らんらしい　ただイギリスの隊が八千五百メートル付近まで登った記録は残ってる　マロリーとアービン云う二人が頂上にアタックしたまま帰って来んかったいう話や
登山者２　日本の冬山とは比べもんにならんのやろな
登山者１　遠山さんが云うには　ヒマラヤには八千メートル級の山が十座以上あるらしい　それを取り巻く五千メートル以上の山は数え切れんくらいや云うてはった
登山者２　どんな凄い景色やねんやろ　想像もできんわ　――　しかし俺らには望むべくも無い高根の花やな
　ヒマラヤはあまりにも遠すぎるわ
登山者１　俺もそう思た「行けん山には興味ありません」て遠山さんに云うた　そしたら遠山さんは「行けな

いんじゃなくて　行かないんや　日本人はまだ誰も行こうとせえへん　遠征費用の問題もあるが
　第一に登山の技術がまだまだ未熟や　今の日本は西洋の技術を真似るのに精一杯で　それ以上の
ものを創りだす事ができん　日本の登山の歴史はまだまだ浅い　君たちがそれに応える時代が来と
るんや　近い将来　日本人の誰かによって　ヒマラヤのピークが征服される事は間違いない」て云
わはった

登山者２　そらそうかも知れんが　金と暇が無い労働者に云うのは　あまりにも酷やろ

登山者１　そう思うか　やっぱり

登山者２　ヨーロッパアルプスに案内人連れて登山する金持ち連中にしか味わえん世界や　反吐が出るわ

登山者１　しかし　俺はそう思わんかったんや

登山者２　――　どういう事や

登山者１　俺の中で火が点いた　いつかきっとヒマラヤに登ってやると心に決めた　そう思た途端　俺の中で
鬱屈していた山への気持ちが　嘘のように晴れた　心が軽なった

登山者２　そんなん云うたかて　どうやって　――

登山者１　いや　何の当ても無いよ　――　当ては無いが貯金を始めた

登山者２　貯金　――

登山者１　社内貯金や　給料から天引きして僅かづつの金を貯金しとる

登山者２　ヒマラヤ貯金　――　云う訳か

登山者１　誰にも云うなよ　花子にも内緒にしとる話や

登山者２　そら　誰にも云わんが　――

登山者１　もう十年貯めた　ヒマラヤに行くのにどれだけの金が要るのかはっきりは判らんが　どうやって行くのかも　どんな装備が要るのかも判らんが　――　この貯金を続けとる限り　俺の心からヒマラヤは消えん

登山者２　――　偉いな先輩は　やっぱり偉いよ　――　実を云うと俺は　去年　先輩が結婚した時　もう山止めるん違うかて思てたんや

登山者１　はは　――　子供も十一月に生まれたばっかりやしな　あ　そうやええもん見せたろか(胸ポケットを探った)　ほら

登山者２　ああ　奥さんと子供の写真

登山者１　どや　可愛いやろ　登志子って云うんや　登る志の子で　登志子や

登山者２　なんや　娘にも山登らす気かいな

登山者１　そういう訳やないが　考える事がどうしても山絡みになってしまうねんな

登山者２　――　結婚して初めての正月に　奥さんと子供家に置いて山に行く夫か　――　一緒に来てる俺の事　きっと奥さん　恨んでるやろな

登山者１　そらお互い様や　俺は君のご両親に恨まれとる　一昨年一緒に登った時　俺がどんくさいばっかりに　君の手を凍傷にしてしもたやろ　あの時　君のお父さんに「あんたと一緒だというから安心していましたが」て云われて俺は平謝りに謝ったが　また君の事を誘てしもた

登山者２　それは先輩の責任やあれへん　親の家に世話になっとるとはいえ　俺かて一人前の社会人や　自分の事は自分で責任とるよ　凍傷に罹ったのも自分の装備の甘さからや　俺の方こそ先輩に迷惑掛け

て済まんかった思とる
登山者１　親いうもんは子供が幾つになっても心配するんや　俺の親父がええ例や　せやのに俺は親父に心配掛けたまま逝かれてしもた　死んだ者に幾ら謝っても　後悔ばっかり先に立ちよる　俺が云える立場や無いが親孝行は生きてるうちにせなあかんよ
登山者２　俺の事より　先輩の事やろ　奥さん子供連れて実家帰ったらどうする気や
登山者１　（ニンマリ笑った）君には判らんやろが俺と花子の愛は槍ヶ岳の岩より固い
登山者２　はァ？
登山者１　判らんやろなァ　一人者には
登山者２　何をニヤけとるんや
登山者１　いや　こりゃ済まん　――　しかしええもんやぞ　嫁はんいうのは　君も早く結婚してみたまえ
登山者２　あ相手がおらんか
登山者１　放っといてくれ
登山者２　なんやったら　会社の事務の子　紹介したるが　――
登山者１　いらん
登山者２　ええ娘やで　色は黒いが南洋じゃ美人
登山者１　（立ち上がった）
登山者２　済まん　堪えてくれ
登山者１　――　先輩は奥さんと山とどっちが大事や
登山者２　何や　突然

登山者２　どっちが大切やねん
登山者１　そら　――　比べられん　比べようも無いやろ
登山者２　俺ははっきり云えるぞ　俺は山が大事や　山でやったら死んでもええ　俺の知恵と体力と技術の限りを尽くして　それでも山に負けるんやったら　それで俺は本望や
登山者１　――　済まん　からこうて悪かった
登山者２　先輩
登山者１　何や
登山者２　奥さんと子供　大事にしたらなあかんぞ
登山者１　――　云われんでも判っとる
登山者２　先輩は山で死んだらあかん男や
登山者１　俺は山では死なん　――　その為に俺は用意周到にやってきたんや　石橋を叩いて渡るようにやってきたんや　気が小さいからな　危ない真似はようせん
登山者２　そうやったな　――　俺にも判る　単独の登山は危険や云うが　単独で登る身になったら　返って全ての事に細心の注意を払うようになる　俺も身をもって知った事や
登山者１　そういうこっちゃ　――　臆病者でないと単独行はできんよ
登山者２　はは　――　そうか　俺らは臆病者か
登山者１　俺は根っからの臆病者や　――　気が小さいから人に面と向かって物云うのも苦手や　君判るか　俺は主義主張で単独行を始めた訳やあれへんのやで

登山者２　そしたらなんでや？
登山者１　俺には技術が無いからデテイル会の先輩らの足手まといになる思てよう一緒に登らんかった　それに難儀な事に足が速過ぎて　人と歩調を合わす事が出来へん　仕方ないから一人で山登り始めたんや
登山者２　そうやったんか
登山者１　俺かてホンマは　人とパーティ組んで登りたかったよ　――　先輩らと一緒に登れたら　どんだけ楽しいやろ思たら　一人でビバークする山が余計に寂しかったわ
登山者２　はは　それが誰も人の居らん雪山に一週間も十日も入る人間の言葉か
登山者１　全てはヒマラヤの為や　――　今でも思い出すよ　最初に入った雪の八ヶ岳で　俺は四日間　誰にも会わず一人で過ごした　あの時の非情なまでに美しい山々を俺は忘れへん　俺は寂しくて寂しくて大声で泣き出しそうやった　自分の孤独を思い知らされた　山が過酷で非常なほど　俺の命のちっぽけさが身にこたえた　山がほんまに大きい事を身を持って知った　――　冬山に登る事は孤独に勝つ事やった
登山者２　――　あの一月の事を思い出すのは僕には耐えられぬ程苦しい　だがそれをどうしても話してしまわなければ　僕はなんだか大きな負債を担っているような気がしてなりません　偶然同じ小屋に臥し　同じ路を歩いた六人のパーティと一人のストレンジャーとの間に醸成された感情　あの時の僕の不注意と親しみの少ない行動とを思い出すと　その記憶をここに記す事は　僕の義務であり　またそう努力することが　今はない六人に対する心ばかりの弔意であるとも思われるのです

その年の暮の三十日の朝　雪の立山に魅せられた僕は　いつものボロ服姿で千垣に着きました　芦峅の佐伯氏のところに寄って東京のパーティの人たちが先に登られたと聞き少なからず心強く思った事です　雪は藤橋でもわずか五寸ほどでしたが　しかしパーティの人達の走跡があっただけに　迷うこともなく　ラッセルもしないですんだわけですから　どんなに楽だったか知れません

その後ときどき　前の人達がつけてくれたシュプールを後追いして登る単独行者に対して　悪意としか思われないほどの非難を聞きますが　そんな事は全く思い及びもしませんでした

小屋に着いた時は四人の人等がみんなストーブのまわりで　スキーや山の話で夢中だったように思います　案内人の福松君と兵治君は炊事場の囲炉裏にあたって何かしていました　僕はそこへ行ってご馳走になりながら　藤木氏や津田氏の話をしたように思います　夜は僕は囲炉裏の側で兵治君と福松君と三人で一緒に寝たのでした　東京のパーティの人たちは小屋の中に張ったテントに火鉢を入れて寝られたようです　翌日の朝は霧が深く雪もチラチラ降っていました　福松君が「こんな日は上は強い風が吹いていて危険だ」と話しましたので　明るくなってからパーティの人達の後についてスキーの練習に出かけました　小屋より二町ほど西で小さい谷に面したところです　僕はスキーが下手なので殆ど見ていて一緒に滑る事は稀でした

昼頃から霧が晴れたので　皆で昨年亡くなった板倉という人の霊を弔いに松尾峠に行く事になりました　それで僕も付いて行ったのですが　黙って挨拶もしないで付いて行ったのはいけなかったの

です　うっかりしておったのですが変な奴だと思っていられたようです　終始兵治君がラッセルして急な斜面を登って松尾峠に着きました　この時一度でも僕が代わってラッセルしていたらどんなにあの人等の気持ちを親しくしていたか知れないと思わずにいられません　パーティの田部氏が僕に　僕達だけで写真を撮りたいから　すまないが君は先に帰ってくれませんかと云われました　あの急斜面　しかも右手温泉側はドカッと落ちているあそこがどうしてスキーの下手な僕に下れるでしょう　僕はハァと答えたものの後戻りする力はありませんでした　一緒に写真に入るのが困るんだったら僕は写真に写らないようにズッと後から行きますと言えばよかったのに　それだのにただ一言言うだけのほんのちょっとの勇気がどうしても出ないのです　それがいつもなんです　ほんとに自分でも情けなくなるのです

しかしここで彷徨しているのは一層いけないと思って反対の西の方へ尾根を歩いて行ったのです

田部氏がそこらを歩き廻って足跡をつけてはいけないと云われるのを後の方に聞きながら歩いてしまいました　その時は別に悪い事をしたとは思いませんでした　それでかなりあの人等が気を悪くされた事は　思わずにいられません　僕はほんとに心細くて　経験の深いあの人等についていないと危険だとさえ思い　出来るだけあの人等の気を悪くすまいと思っていましたから決して反抗的にしたのではなかったのです　――　帰りは追分付近から雪が降り出し　皆で登ってきたシュプールをただ一人漕いで弘法に帰りました

しばらくたってからパーティの人達が　威勢良く声を上げて笑いながら帰って来られました　そうして餅を炊いてお正月のように賑やかな夕食をされました　兵治君が僕にも餅を分けてくれました

そうして僕に　最初小屋に入ってきた時　自分はこういう者ですからなにとぞよろしくお願い

しますと言って挨拶すればよかったんですよ　まるで知らない人に黙ってついて来られると誰だってちょっと不愉快になるのですよ　――　と親切に言ってくれました　それで僕は初めて自分の不注意に気がつき　名刺を持っていなかったので手帳の紙にＲＣＣ加藤文太郎と書いて　どうかよろしくと言って渡したのです

次の日は快晴だったので　パーティの人達は朝早くから起きて準備されました　僕が荷物をまとめている時　あの人等は出発し　田部氏は後頼むよと言って行かれました　僕は小屋の中を一人で掃除してから　皆の後を追いました　追いついた時田部氏が僕に　君は何処へ行くんですかと尋ねられたのです　黙っていると　福松君が室堂に行くんでしょうと答えてくれました　僕は本当は剱岳に行くこの人達と一緒に行きたかったのですが黙っていました

追分小屋の附近から僕が先頭になってラッセルし夏道に沿って進むうち　窪田氏がこっちがいいと言って自分で先頭になられました　鏡石のところでちょっと休んでから　あの人等は地獄谷を通って剱沢の小屋に行かれるので別れました　この時のなんだか物足りない淋しさ　賑やかだったこの数日間　それはこのときの淋しさを一層深め　いつもなら後を振り返り送るエーホーの声も飲み込んでしまいました

三日の朝　室堂の小屋に一人起きた僕は　剱沢に向かいました　室堂から東へ辷って谷に下り　それに沿って行きました　雷鳥沢の南側の尾根を乗越し　クラストする雪の剱沢を下って小屋を見出だした時はほんとに嬉しかった　小屋の中に入ってみると　あの人等はストーブを囲んで愉快そうに話をされていました　僕がちょっと挨拶すると　昨日君が君が一ノ越を登っているのを見て皆心

配したぜ　あんなにお天気が悪かったんだからねと言われました　僕が今日皆で剱にお登りになったらどうでしょうと言うと　今日は風が強いから駄目だと言われました　それで僕は　今晩ここへ泊めてくださいませんかと言ったんです　ほんとに図々しい考え方ですが　皆に連れられて剱に登りたいと思っていたのです　そのとき窪田氏が　泊めたいけれどももしお天気が悪くなって一人で帰れなくなるといけないから今日帰ったほうがいいと思うと言われました　それで僕は今度はすみませんがあなた方のパーティに入れてくださいませんかと言ったんです　そしたら窪田氏が君は一人だからパーティということが分からぬでしょうが　パーティの中に知らない人が一人でも居ることは不愉快なんです　また昨年の乗鞍の遭難についても　知らない人々でパーティを作った為だという非難もあるから　お気の毒だけれど今度はお断りすると云われました　そしてもしこの小屋に泊まりたいと思われるなら案内者を連れてきたまえ　案内者を連れぬ人はだいたい小屋は使えないのです　案内者を雇うお金が惜しいなら山に登らないがいいでしょうと云われました　福松君もＲＣＣの児島氏の組になって来なさいといいます　僕はもうこの小屋に泊まることはあきらめたので兵治君に　今日だったら剱に登れますよ　お天気は大丈夫だし　どうでしょう登りませんかと言って誘ってみたんです　すると兵治君は　登れるなら君　登ってみたまえと言いました　そうだ　ほんとに僕は図々しい考えを持っていた　一人で来ながら　他人の人等の助力によって山に登ろうなどと考えたことはほんとに悪かった　一人で山に登るのもいい　だが　他のパーティの邪魔になったり　小屋の後片付けについて非難を受けたりするようでは　山に登る資格はない　――　僕は剱に出来るだけ近くまで行ってみたいと思ったので早月の方の写真を撮ってくると言って出かけました

その時あの人等はご飯を食べませんか　お菓子はどうですかと言って下さいました　僕は丁寧にお断りしてから　軍隊剱に登りました　雪が非常に急に谷に落ちている悪いところで　僕は前進が出来なくなり引き返しました　あの人等は小屋の近くでスキーの練習をされていましたが　僕が下りていくと　急いで帰られました　小屋に入って水をもらい　僕はありがとうございます　色々ご厄介になりましたと言ってお別れし　一人で　別山を越えて帰りました　――

登山者１　――　ラッセル泥棒　いう言葉を俺は初めてあの人たちの口から聞いた　他人が苦労して漕ぎ進んだ雪道を　後から楽に登ってきて　何が単独行かて笑われた　――　俺はグウの音も出んかったよ　弘法小屋で最初にあの人たちに会ったとき　俺は何の挨拶も出来んかった　無言で笑いかけると　向こうの目が何か急に厳しなった　そうなるともう駄目や　自分がシドロモドロになるのが嫌で黙りこんでしまう　余計に相手の悪感情を募らせてしまうんや

登山者２　――　先輩が山降りた次の日やったな　剱沢小屋に居ったその六人が雪崩に襲われたんは

登山者１　――　俺一人だけが生き残ってしもた　あの人等に剱沢小屋を追い出されたおかげで俺一人が――　人として出来損ないの俺一人がや　俺はもう一生　あの人等に謝る事も出来ん

登山者２　俺がもしそんな目にあってたら　俺やったら　山やめたかも知れん

登山者１　そうか　――

登山者２　先輩はやめんかったな　――　それどころか　もっと厳しい山行をどんどんするようになったな

登山者１　阿呆やからな俺は　――　山登る以外に能あれへんねや

登山者２　あの遭難事故があってからの先輩は　云うたら　――

登山者１　なんや？
登山者２　バラモンの苦行僧のように俺には見えたよ
登山者１　はは　――　確かに十日も山にこもってたら三キロは痩せる　――　せやけど俺は坊さんみたいに煩悩は捨てられん
登山者２　何の話や
登山者１　サラリーマン根性が染み付いとる　例えば正月を挟んで十日の休みを取るとするやろ
登山者２　ああ
登山者１　その十日の行程の最中（さなか）に　吹雪で三日も四日も足止め食らうと　もう居ても立ってもおられんようになるんや　会社の事が気になって仕方がない　吹雪の小屋の中で見る夢云うたら　会社の上司に怒られたり同僚に白い目で見られたりする夢ばっかりや　無断欠勤にならんように　遅刻せんようにて　山に居ってそればっかり考えとる
登山者２　あるある　――　あわてて山降りて　この最終列車に乗らな間に合わん云うので　息せき切ってプラットホームに駆け込んだのに　すんでのところで列車が出て行ってしもた　頭の中が真っ白になったわ
登山者１　精神衛生上悪いな　山登りは
登山者２　はは　山男も大した事無いよ
登山者１　大した事ない　街に居ったら吹けば飛ぶような労働者　山に居ったら人とよう歩かん山男
登山者２　里に居れば山を想い　山に居れば里を想い　――　か　俺はいったい何処に居りたいんや

登山者１　早よ会いたいな　花子と登志子に
登山者２　――　自分の家族を持つてどんな気持ちや
登山者１　そらな　――　なんとも云えんよ　仕事終わって家に帰ると　玄関に灯りが点っとる　味噌汁と秋刀魚の焼けた匂いが　外まで匂てきよる　登志子の泣き声とそれをあやす花子のねんねんよの唄が聞こえる　――　玄関で俺は　戸も開けんとしばらく呆っと立っとった　――　自分にこんな幸福(しあわせ)が来たことに　なんでか後ろめたささえ感じたよ

登山者２　温いんやろな　奥さんも赤ちゃんも
登山者１　ああ　得も云われん温いもんや
登山者２　――　俺も温かったやろか　お袋と親父は　――
登山者１　そら子供の頃は温かったやろ
登山者２　――　ありがとう　お袋
　　ありがとう　親父

登山者１　おいおい
登山者２　(立ち上がって)山は寂しいなァ　――　死にたくなるほど寂しいなァ　――　なんでこんな所に来てしまうんやろなァ　――　(見上げて)真っ黒や　槍ヶ岳の穂先が真っ黒の巨人の頭が悲しい程天を指して　吹雪に嬲られとる　あんな気違いみたいな場所に俺らしがみついとってんなァ　見てや先輩　槍の穂先から続くあの尾根　ごつごつした奇怪な岩峰が北に向かって並んどるあの怪物

みたいな尾根　北鎌尾根

登山者１　来年や　――　来年の冬はきっと越えるよ

登山者２　はは　笑うわ「不死身の加藤」「単独行の加藤」　――　どんな厳しい山も一人やったら全て成功させてきたのに　俺と登ったたった二回のパーティで　二回とも失敗してしもたな

登山者１　四日も吹雪が続いとるんやからな　仕方あれへんよ

登山者２　もし一人やったら成功してたとは思わへんか

登山者１　氷の北鎌尾根を一人でやれるとは　到底思えん　ザイルの確保がないと俺には無理や

登山者２　しかしザイルを結んだせいで　俺と一緒に先輩も落ちた　――　先輩一人だけやったら　きっとなんとかして　槍の肩の小屋に戻れとったやろ

登山者１　何が云いたいんや　君は

登山者２　俺はパートナー失格と違うんか

登山者１　君の事を信頼したからこそ　パーティを組んだんやぞ

登山者２　――

登山者１　俺は最近の君の目覚しい山行を耳にして　君とやったら組めると確信した　実際　一昨年　前穂高の北尾根を一緒にやった時　君のクライミング技術には舌を巻いた　あの時　君の手が凍傷になったんは　俺の岩登りが下手でモタモタしたせいや

登山者２　違う　予備の手袋をもうひとつ用意してたら　凍傷になんかならんかった

登山者１　いや君一人やったら　手袋を濡らさんと　穂高の小屋まで行けとったはずや

登山者２　俺の準備不足や　――　せっかく先輩が一緒に登ろ云うてくれたのに　俺が迂闊やったんや

登山者１　もうええ　云いおうてもキリない
登山者２　今度も俺が足踏み外してしもた
登山者１　もうええ云うてるやろ　――　あの吹雪の中で動いたんがあかんかったんや　責任はお互いにあるよ
登山者２　――　俺も先輩も　ほんまはパーティなんか組める人間やないんかも知れんな　山の孤独に耐えて耐えて登らんことには　山が許してくれんのかも知れん
登山者１　許すも許さんもないやろ　一人では登れんルートがある以上　パーティを組むのは当たり前の事やろ
登山者２　先輩は俺を信頼した云うたな
登山者１　云うた　俺は君を信頼しとる
登山者２　俺も絶対的に先輩を信頼しとる　――　今まで自分しか信用出来へんかった男二人が信頼しあういうのはどういう事や　二人やったら　何でも出来るいう気になってたん違うんか　山をなめてしもたんと違うんか
登山者１　それは　――
登山者２　俺ら二人とも槍平の小屋に荷物の大半を置いて来たんはなんでや　サブザックに二日分の食料しか持たんと槍の肩の小屋に入ってしもたんはなんでや
登山者１　――
登山者２　おごっとったやろ　俺らは　――　俺らやったら二日もあれば　北鎌尾根をやっつけて　槍平の小

屋に戻ってこれるて信じとったからやろ　なァ先輩　違うか

登山者１　――　違わん　君の云う通りや　俺は知らん間に山を舐めとったんかも知れん

登山者２　別に先輩を責めてるわけやない　俺も今になって気付いた事や

登山者１　――　確かに　単独行やったら　どんな事があっても下の小屋に荷物置いてきたりなんかせんわな

登山者２　この吹雪が止まんのも　山が俺らの事を怒っとるのかも知れへん

登山者１　――　二日間　吹雪で肩の小屋に閉じ込められとる間　ほんまは俺は引き返すつもりでおった　食料も底をつきよるし　これ以上足止め食ろたら無理や思た　――　サブザックの最後の米で炊いた雑炊を食いながら　俺はその事を君に相談しよ思とったんや

登山者２　やっぱりそうか　――　俺もいつ先輩が切り出すかて思てたよ

登山者１　君に云うたら笑われんの違うか思て怖かったんや　加藤文太郎も大した事無い奴やて思われんのがな

登山者２　皮肉なもんやな　――　一人で来とったら　きっと引き返したのにな

登山者１　――　雑炊食い終わって俺はまだ逡巡しとった　するとさっきまでしとった風の音がいつの間にか止んどった

登山者２　小屋の外に出てみると風が止んで　雪も収まっとった

登山者１　雲が吹き払われて青空が覗いとる　見えんかった槍の穂が現れて　凍った岩がブロンズに輝いとる

登山者２　あんな美しい槍ヶ岳　俺は見たことなかったわ

登山者１　非情と絶美　――　荘厳と云うてもまだ足りん程の姿に俺は息を呑んだ

登山者２　山が呼んどる
登山者１　偽の晴れ間や云う事は判っとった　季節風と低気圧の勢力が均衡して　ごく短い時間に晴れ間が来ることがある　二時間持つか三時間持つか判らんが　その後で猛吹雪になる事は目に見えとった
登山者２　槍の頂上まで一時間　北鎌尾根を降りるのに二時間　肩の小屋まで引き返すのを入れて往復六時間
登山者１　六時間もこの天気が持つとは到底思えん　――　やっぱり無理や　引き返すべきや　――　頭では判っとったんやが　――
登山者２　山が呼んどる
登山者１　山が呼んどる　――　山が呼ぶ声を確かに俺は聞いた
登山者２　やろう　先輩
登山者１　ああ　やろう　――　自然と口をついたその言葉に　俺はすぐ我に返って愕然としたが　もう後戻りは出来へんかった　俺らは小屋に引き返し　憑かれたように出発の準備にかかった
登山者２　甘納豆一缶　雑魚の油揚げ一掴み　板チョコレート二枚　クリームチョコレート十三個　りんご二個　非常食として残っていたそれだけの食料とコッヘル二個　アルコールバーナー一個　懐中電灯二個をそれぞれのサブザックに分け入れてから　部屋の中をざっと掃除して小屋を出た
登山者１　外に出た俺らはすぐさま互いの腰にザイルを結びピッケルを握った　雲間が晴れて　さっきよりもまだ青空が開けとる　俺は槍ヶ岳の山頂を睨んだ　先頭に立って氷の岩肌に手を掛け登り始めた
　夏道ルートは風に雪も振り払われて固く締まり　アイゼンがよう効いた　ピッケルで足場を切

りながら快調に登り　頂上に行くにはそれほどの苦労はいらんかった　俺らは予定通り一時間で山頂に立った

登山者２　頂上からは　素晴らしい冬山の景色が眺められた　さっきまでの吹雪が嘘のようや　穏やかな山の峰が皚々（がいがい）と続いとる　どの山も雪の布団を被って静かに眠っているように俺には見えた

登山者１　この季節には珍しい気味悪い程の快晴や　俺の胸はざわついた　やっぱり偽の晴れ間やいう事を俺は確信した　時間がない　早よせんといつ吹雪きだすか判れへん　俺は吉田君を促して　狭い槍ヶ岳の山頂を北鎌尾根の方に歩いた

登山者２　ザイルに付いた雪を払い落としながら俺は　北鎌尾根の降り口から下を覗いた　夏でも一般ルートとして認められてへんこの尾根は　極めて危険な所が多い　北斜面やから氷も分厚く岩もほとんど出てへん　俺は先に降りる先輩を確保する為に　崖っぷちに腰を下ろして踏ん張りの効く岩に足を掛け　肩絡みにしたザイルを慎重に繰り出した

登山者１　吉田君に確保されながら俺は　アイゼンのツァッケを氷に蹴り込み　わずかな足場と　ともすれば掴み損ねてしまう氷のホールドを頼りにして一歩一歩降りていった　足場の良い所でアイスハーケンを打ち込み　リングにザイルを通す　滑りかけると　吉田君が確実にザイルを張って踏ん張ってくれよる　ザイルがものを云うた　ザイルなしでとても降りられるところやなかった

登山者２　北鎌尾根は足元に平たく延びて見えた　あんまり明るうて尾根の起伏がはっきりせん　雪がついてヤセ尾根には見えんかった　肉付きのええしっかりした尾根に見えた　俺らは互いに確保しあいながら　氷壁を降りていった　アイゼンの爪も立たん硬い氷が張り詰めた悪場が続いた　ザイルを繰

り出したり巻いたりを繰り返して　俺らは岩峰の基部に立った

登山者１　振り返って見上げると　槍の穂先が肩の小屋から見る以上に　峻険な岩壁に思われた　ルートを取り違えたら頂上には戻られへんと思た　俺は空を見上げた　吹雪になったら道を見失うかも知れん

北鎌尾根を境にして東の方の山には積雲がかかっとる　西の方は晴れとるが白っぽく濁っとる

ふと太郎山の上空に目を止めるとレンズ雲がひとつぽっかりと浮かんどった　南向きに傾いてレンズのふちに糸のような雲がひとつ絡みついとる　よく見ると　それは水平に渦を巻く雲の固まりやった

登山者２　「まずいな」と先輩が云うた　俺もその言葉で天気が悪なるのを悟った　目標にしとった　二八九九高地の独標（どっぴょう）まで行って帰ってくるだけの余裕があるかどうか判らん　俺と先輩は相談して三十分だけ行ける所まで行って戻ろうと決めた

登山者１　俺は歩きながらずっと太郎山のレンズ雲から目を離さんかった　もし天気が悪くなるとしたら　あのレンズ雲に前兆が現れると思た　すると三十分もせんうちにレンズ雲が消えよった

登山者２　「レンズ雲が消えたぞ」その言葉に俺がそっちを見た時　突然突風が襲いかかってきよった　重い風やった　俺と先輩は吹き飛ばされかけて　思わず地面に這いつくばった　山が唸りだした　北西からの季節風が雪を飛ばして来よる　それがすぐに舞い狂って　目も開けられんような吹雪に変わった　空は三時間足らずの中休みをして　溜め込んだエネルギーを一挙に放出しよった

登山者１　退却するしかあれへん　俺らは這うようにして　自分らがつけてきた足跡を辿った　雪に足跡を消

されんうちに　槍の穂先の取り付き地点まで戻らなあかん　横殴りの暴風に何度も飛ばされそうになりながら　俺は足跡から目を離さんかったが　十五分も進むと足跡がついに消えた　五十センチ先の視界も利かへん白い闇の中で　俺らは帰路を見失のうた　コンパスを取り出して恐る恐る南に向かって進んだものの　槍の穂先は何処にも見えん　風の方向が乱れとるからすぐ近くまで来とるのは判るが　取り付き地点を探し出すのは不可能やった

登山者２　俺は先輩の先に立って手探りで歩いた　どんどん傾斜が急になってきよる　槍の穂先に取り付いたとは思たが　このまましゃにむに登って行き詰る可能性は大きかった　時計を見ると　午後の四時を過ぎとる　天候回復の見込みがあれへん以上　これ以上の行動は危険やった　ビバークする事に決めて　吹きさらしの雪の尾根に俺と先輩は交替で竪穴を掘った　掘る端から風が埋めにかかりよる　二人でしゃがめる穴ができた時には　もう夜になりかかっとった

登山者１　穴の底にザイルを敷き詰め　サブザックを尻の下に置いて　二人で縮こまるように膝を抱いて座った　頭上を吹き抜ける風はおよそ風速三十メートル　寒暖計の針はマイナス二十度を差しとる　風が吹きこむ為にバーナーは点けられへん　俺らは甘納豆を一掴みと板チョコを一枚づつ分けあって口の中で溶かしながら食べ　長い夜を迎えた　ウツラウツラとする度に断続的に吹き込む風が俺らの事を叩き起こした

登山者２　果てしない地獄のような夜が明けた時　気がつけば俺らの膝上ぐらいまで雪が積もっとった　相変わらず吹雪は止みよらん　俺と先輩は立ち上がってサブザックとザイルを掘り出し　雑魚の油揚げと甘納豆を少しづつ食べながら　今後どうするか相談した　この吹雪では到底取り付き地点は見つけられれん　しかしこの竪穴の雪洞でこれ以上ビバークするのもかなわん　体力のあるうちに少しで

も風の防げるビバーク地に移動したい　俺らはすぐに行動に移った　じっとしとるより歩いている方がマシやった　頭が風にやられてボウッとしよる　俺と先輩は吹雪の中を岩陰を求めてさまよい出した

登山者１　喉が焼け付くように渇きよる　体温が下がるのは危険やと思たが俺は時々雪を掬って舐めながら歩いた　岩陰が何処にあるか判らんが　どないしてでも見つけんと死んでしまうと思た　先行する吉田君の足取りがフラフラしよる　風に煽られて東側にどんどん寄って行きよる　風下は雪庇が張り出して危険や　声を掛けようとした時雪庇を踏み抜いて吉田君が落ちた　とっさにザイルを握り締めて踏ん張ったが止まらん　足が滑りよる　引きずられるうちに俺の足元も崩れた　俺と吉田君は北鎌尾根の急な東斜面をどこまでも滑っていった

登山者２　――　気がつけば　俺は急斜面の中腹に止まっとった　先輩がザイルを手繰りながらこっちにやってきて「大丈夫か」と声を掛けてくれた　深い雪のおかげでどこも怪我してへんようやが　頭の芯が寒さにやられてボンヤリしとる　足先もズキズキしよる　どれぐらい下まで流されたか判らんが　傾斜が六十度以上ある新雪の斜面はまだ延々と下まで続いとる　いつ雪崩てもおかしくないその場所で　先輩は尾根の方を眺めとった

登山者１　俺は尾根に戻るべきか下に降りるべきか考えた　二、三歩上に向かって登ってみると雪が滑って体がもどされてしまう　この軟らかい雪の斜面を登るのはあまりにも困難や　またいつ流されるか判らんが谷に下りたほうが風もましやろ　俺はそう決断して　吉田君を促して下に向かった　時々腹に響くような音を立てて近くの斜面が雪崩よる　俺らは恐怖に駆られながら　雪まみれになって降

りた　転げまろびつしながら黙々と雪の急勾配を下った

登山者２　四時間程もかかってやっと底の沢にたどり着いた　頭が朦朧として俺はどこに居るのかも判らんかった　先輩に聞くと「天上沢や」て教えてくれたが　なんでそんな所に居るのか訳が判らんかった　風はましやがあまりにも寒かった　先輩が雪洞掘っとる　俺も手伝わなあかんが足先がうずいて立ち上がれん　先輩がしきりに俺に話しかけよるが何を云うてるのか判らん　俺はただうんうんうなづいて　先輩が掘るのを眺めとった　時々気が遠くなって寝そうになったが　その度に先輩が起こしてくれた　俺は「大丈夫大丈夫」てつぶやいとった

登山者１　吉田君の様子がおかしい　顔色が真っ青になっとる　早く雪洞を掘って体温(ぬく)めたらんと凍死してしまいよる　二人が入れるだけの横穴を掘るのに二時間掛かった　俺はグッタリしとる吉田君を穴に押し込み覆いかぶさるようにして身体を抱いて全身を擦ってやった「吉田君　おい吉田君　今温(ぬく)い物食わせたるからな」コッヘルに雪を入れてバーナーで湯を沸かした　ピッケルで凍ったりんごを砕き　クリームチョコレート六粒と一緒に煮て　吉田君に少しずつ食わせた　口を動かして飲み込む吉田君の様子を見て俺は一安心した　吉田君の食い残しを食べながら俺は地図をにらんだ　一番近い湯俣まで北へおよそ六キロ　食料はあと甘納豆一掴み雑魚の油揚げ少々クリームチョコレート七粒リンゴ一個　アルコールはあと二、三回湯を沸かせる量しか残っとらん　雪の深い天上沢をラッセルして吉田君を連れてゆくのはあまりにも過酷やが頑張って貰らわな仕方無い　俺は吉田君を抱いたまま夜の天上沢の風の音を聞き少し眠った　しかし朝三時頃あまりの寒さに目が覚めた　吉

田君に声を掛けると「海の音がするここは神戸か」とききよる　幻聴が始まっとる　俺は急いでコッヘルに雪を掬って湯を沸かし　リンゴを砕き残りのクリームチョコレートを煮て吉田君と一緒に食った　「今日中に湯俣まで行くぞ　湯俣で湯に浸かろう」そう吉田君を促して出発した　コンパスを出して北を目指した　雪が深い　胸のところまで雪がきよる　泳ぐようにして進んだ　「足が痛い歩けん」吉田君は何度もそう云って座り込んだが　その度に俺は吉田君を引き起こして歩かせた　もう二日間ろくな物を食ってない　漕いでも漕いでも雪の道は遅々として進まん　吉田君がぶつぶつ云いながら笑ろたり泣いたりしとる　居もせん誰かと喋っとる　頬を叩いてどやしつけると「すまん先輩」云うてまだトボトボ歩き出す　そんな事を繰り返しながら七時間進んで　とうとう吉田君が座り込んだまま動かんようになった　俺は吉田君の全身を抱いて擦りながら　大声で何度も吉田君に呼び掛けた　甘納豆を口に放り込んでやったが　口が動かん　噛め吉田君　噛んでくれ

吉田君　吉田君　吉田君！　ついに俺の腕の中で吉田君は　――

登山者1、背後に立っていた登山者2を見た。

間。

登山者1　――　吉田君　俺は今まで　――　誰と喋っとったんや

登山者2　また風　吹いてきたで　――　頑張りや先輩　湯俣までもう少しや

登山者2、ピッケルを雪に突き刺した。
雪が本格的に降り出し、登山者2の姿が見えなくなった。
音楽「街の灯」。
登山者1、歩き出した。

登山者1　この雪の沢をまっすぐ行くと千丈沢と天上沢の出会いに第三吊橋があって　その橋を渡ると水俣川に沿った林道がつけられてあります　その道をどこまでも歩いてゆくと　やがて日本海に出ます　海上にはイカ釣りの船のランプが星のように瞬いてとても美しいです　リアス式海岸の浜坂の港町は　背後を山に囲まれた扇状の小さな町で　その町のちょうど真ん中辺りに俺の生まれた家があります　その家を出て西に向かえば　小さな山のふもとに花子と初めて出会った宇都野神社があり　その奥社に続く石段をどこまでもどこまでも登ってゆくとやがてヒマラヤにたどり着くはずです　しかし今はとても疲れた　長田神社の常夜灯を右に見て　通り過ぎた所を左に曲がると　格子戸のつましい家から灯りが洩れています　花子　登志子　ただいま　――　悪いが少し眠らせてくれ

吹雪の中で登山者1、立ちつくした。

終わり

参考文献

「単独行」　加藤文太郎　（二見書房）
「穂高に死す」安川茂雄　（三笠書房）
「孤高の人」　新田次郎　（新潮文庫）

引用箇所

４ページ５行目～５ページ５行目　登山者２のセリフ
９ページ４行目～９ページ１２行目　登山者２のセリフ
３１ページ１４行目～３６ページ５行目　登山者２のセリフ
以上「単独行」より抜粋・引用